

市民環境大学OB会 ニュースレター



第18号 2018年1月18日 発行

元気なヒヨドリ 福生南公園にて

北野水再生センター見学会おこなわれる！ シリーズその3

11月16日のOB会は久しぶりのフィールドワークで、八王子北野にある水再生センターの見学会が行われました。OB会以外の参加者を含め20名あまりの参加となりました。

OB会では以前より浅川水量減少問題に注目してきましたが、今回の北野水再生センターはその問題の発端となったところで、ここからの再生水の浅川放水が中止されることにより浅川の水量が減少し、水辺の生き物たちの生態系が大きく影響を受けることが懸念されています。

今回の見学会は水再生センターを実際に訪問しその現状を把握するとともに、日野市と同じ浅川流域を持つ八王子市の浅川水量減少問題に対する見解、対策案を直接に伺おうということになり、今回の見学会が企画されました。

水再生センターでは八王子市水循環部の担当課長はじめ6名の方々により、書類による説明、実際の水再生工程の見学説明が行われました。以下にその概要と行程見学の写真を添付します。

1. 北野水再生センターへの水の流入

水処理系統は汚水と雨水を合流させて流入する合流式、汚水と雨水を別系統にし、雨水は川へ放流、汚水は下水処理場へ流入する分流式がある。北野処理区では分流区域は平成27年に秋川処理区へ編入済みであり、残る合流区域も平成32年に編入予定で水の流入は終了するとのことである。

2. 下水処理工程

処理センターへ入ってきた汚水は以下の工程で処理される。

沈殿池→ポンプ輸送→最初沈殿池→曝気槽(活性汚泥法処理)→最終沈殿池→塩素混和池→川へ放流

3. 浅川の水量確保対策

公共下水道北野処理区の編入により、現在の4万t/日の北野処理場からの浅川への放流がなくなる。八王子市としては自然環境や景観の保全、まちづくりにおける浅川の活用を進めるためにも水量確保の取組みを具体的に進める必要があるとの認識で以下の対策案が説明された。

①市街地・宅地における雨水浸透施設の設置

②不明水対策の推進・・・下水道系統へ流入している湧水(2か所)を浅川へ導水する。また、経年劣化した管きよを更生し地下水の侵入を抑制する。

③森林の循環による保水力の向上

間伐や枝打ちなどの森林の保育を適正に行い保水力のある土壌を作る。伐採適期の森林資源活用や植林が進むことでの森林の循環、水源涵養機能など森林の多面的機能向上を目指す。

上記①～③の対策を進めるとの事であったが、現在の浅川への放流量4万t/日に対し、②項の推進で1万t/日は具体的に読めるものの残りの対策は具体性に欠ける印象であった。上流の八王子市側も浅川への放流がなくなることへの問題意識があることは確認できたがさらなる具体的対策を望みたい。



水処理施設見学 汚水ポンプ室前にて



ばっ気槽前にて説明を聞く参加者

[OB会コラム] OB会ニュースレターではいろいろの活動をされている会員の方々にOB会コラムの中で投稿頂いています。今回は日野市のことにも大変詳しく、知識も豊富な細川さんに浅川の水量減少危機の問題に絡めて水についての大変興味深い一文を寄せて頂きました。

投稿

地神は渴く

細川 秀治

『嫁に行くなら、日野がよい…と昔から言われてきたそうです。』と日野市の広報に記事があった。こういうキャッチコピーは、お国自慢として唄の文句にあるような気もする。Googleで“嫁に行くなら”を検索すると、「どこがよい」と続くフレーズは見当たらず、そのかわり「うどん打て」「棺桶を背負っていけ」などのフレーズがある。

♪嫁に行くなら…は実際にはあまり使われていない文句のようなので、別の文句で検索してみる。「××へは嫁にやるな」で検索すると、所沢、安城、御野郡、新発田など幾つかの地名がヒットする。いずれもその土地に嫁に行くと大変な苦勞が待っているため、嫁にやるのを避けるのが親心であろうか。

近いところでは所沢で、市のホームページに以下の説明があった。

“所沢へは娘を嫁にやるな？（弘法大師の三つ井戸伝説）”

ある夏の暑い日、旅のお坊さんに水を求められた農家の娘は、わざわざ遠い井戸まで出かけ、冷たい水を汲んできてあげました。娘の苦勞を見ていたお坊さんは立ち去る前に三つの場所を示し、ここに井戸を掘るといって残していきましました。武蔵野台地の多くの地域では渇水期になると近所の浅井戸は涸れてしまう。遠くの「まいまいず井戸」まで行き、その深い底まで降りて水を汲む。日々の水汲みは嫁にとって大変な苦勞。雨よ降ってくれ。見えない微地形も植物相や匂いで水の気配がわかる。所沢の地名は地水に由来するものかもしれません。所沢には浅井戸で水の涸れない宙水地形が数カ所あります。

“八王子の弘法伝説”

水無し河原の伝説は、弘法伝説である。旅のみずぼらしい坊さまが川を通りかかった。長旅で喉の渇きを覚え、川のほとりにある一軒の茅屋に立ち寄り水を下されと頼んだ。しかし、この家の老婆は、坊さまを一瞥すると、くれる水はないと冷たく断った。すると、坊さまは悲しそうな顔をされて、川のほとりでなにごとかつぶやいて立ち去ったそうじゃ。これより、いままで滔々と流れていた浅川の水はこの時限り干枯れ、ついに水無河川になったんだと。

八王子の意地悪婆さんにはあまり気持ちの良い噂ではない、恐ろしい乞食坊主の評判は八王子では悪い。浅川に水が流れなくなったのは弘法大師のせいである。八王子の老婆も初めから意地悪だったのではない。若い頃は所沢のように親切で気立ての良い娘さんであったのかもしれない。しかし所沢や八王子のように、水の不自由な土地では、毎日の水汲みは重労働で骨も折れるし心も枯れてくる。黙々と働く嫁の怒りは溜まってストレスの澱になる。そして老婆はキレ、乞食坊主に出遭えば、わらわは乞食坊主のために水を汲むのではない。働かざるもの食うべからず、一億総活躍社会じゃ、乞食は渴いてしまえ、それが自己責任じゃ！となってしまう。

雨は天の恵みであり、貧富、貴賤、善悪の区別なく、万民平等にもたらされる。水は惜しまずみんなで分かち合うべきものなのかもしれない。しかし雨はそのまま手元に留めるのは難しい。市街地や島嶼部では雨水を浸透させないで貯留をもっぱらにする天水派が活動している。

雨を土地に浸透させ地の力と合体させれば、飲用や農業に長期間安定して潤沢に利用できる。天の恵みを受け留めることのできるのは地の力である。大地に浸透した雨水は、大地の神、黄泉の神、国津神によっていのちを吹き込まれ生命の泉となる。府中の大国魂神社のような地の神をおろそかにしてはいけない。農業神でもある。

“日野がよい”のは、土地が水で潤っていて、地の恵みで緑も豊かだったことだ。これは地の神のおかげだ。豊草原の瑞穂には、魚、鳥、虫、小動物など、さばえなす多様な生物相が形成される。釣瓶で水を汲めるような浅井戸のある土地には、ミズもオケラもホタルも棲んでいる。それらを食べに野ねずみや鳥もやってくる。日野はかつて野生動物の観察フィールドで、淡水区、野鳥の会、蚕糸研などの施設もあり、多くの淡水魚研究者、野鳥観察者、昆虫研究者が集っていた。それだけ多くの生物が棲んでいた。いまは幾つかの水感受性の高い生物が少なくなっている。そのような生き物の棲みにくい土地でも、人間なら住めるのか。

大地の神々が渴けば、棲む生き物も、人の心も渴く。嫁の心も潤いが消える。地の水は命の水である。

OB会メンバー 活動イベントニュース

- OB会フィールドワーク北野水処理センター見学会が開催される。11月16日
- 第81回全都一斉大気汚染測定運動に参加。11月30日～12月1日

OB会 輪読報告 題名 森林飽和 著者 太田猛彦

12月 第二章 はげ山だらけの日本 石油以前、人は何に頼って生きていたか